

平成30年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

平成30年7月27日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <p>秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251</p>
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表予定は平成30年8月31日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 http://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。http://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>	

I. 予報の要点

水 稲	<p>斑点米カメムシ類はやや多いと予想されます。防除対策情報第6号を参照して、出穂期10日後頃の茎葉散布剤による防除と、散布当日から7日後までの畦畔や農道の草刈りを必ず実施してください。穂いもちや葉いもちの発生状況に応じて防除してください。フタオビコヤガは少ないと予想されますが、鹿角や北秋田地域では一部ほ場で第2世代幼虫のすくい取り数が多かったため、多発に注意してください。</p>
大 豆	<p>マメシンクイガはやや多いと予想されます。連作ほ場では、8月下旬～9月上旬に防除してください。ダイズアブラムシは多いと予想されます。発生が多く見られる場合はアグロスリン乳剤等で防除してください。</p>
野 菜	<p>ねぎ（秋冬どり）では、黒斑病・葉枯病がやや多いと予想されます。両病害に効果のある薬剤を散布してください。きゅうりでは、斑点細菌病が多いと予想されます。発病部位を除去した上で防除に努めてください。また、ワタヘリクロノメイガが多いと予想されます。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期の内に防除してください。トマトでは、ヒラズハナアザミウマが多いと予想されます。被害果の摘果を行うとともに薬剤を花房に付着するよう丁寧に散布してください。えだまめでは、べと病が多いと予想されます。薬剤を葉裏にかかるように丁寧に散布してください。虫害では、ツメクサガ、ダイズサヤタマバエがやや多いと予想されます。ツメクサガは、幼虫の発生初期、ダイズサヤタマバエは、品種毎の散布推奨期に防除を実施してください。</p>

果 樹	<p>りんごでは、黒星病とナミハダニが多いと予想されます。黒星病の防除は7月9日発行の注意報第1号を参照してください。ナミハダニは発生状況をよく観察し遅れないように殺ダニ剤を散布してください。コロマイト乳剤は高温時に使用すると黄変落葉のおそれがあるため注意してください。</p> <p>なしでは、黒星病とナミハダニが多いと予想されます。黒星病の防除では薬剤の散布間隔に注意してください。ナミハダニは発生状況をよく観察し遅れないように殺ダニ剤を散布してください。コロマイト水和剤は高温・乾燥時に使用すると黄変落葉のおそれがあるため注意してください。</p>
-----	---

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稻	穂いもち	全県	平年並	やや少ない	平年並
	紋枯病	全県	—	少ない	やや少ない
	セジロウシカ(第2世代)	全県	早い	やや少ない	やや少ない
	斑点米カメムシ類(第2世代) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	—	多い	やや多い
			やや早い	多い	やや多い
			早い	多い	やや多い
	フタオビコヤガ(第3世代幼虫)	全県	やや早い	やや少ない	少ない
アワヨトウ(第2世代幼虫)	全県	—	—	やや少ない	
大 豆	紫斑病	全県	やや早い	—	平年並
	アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	全県	平年並	—	やや少ない
			早い	—	多い
	吸蜜性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	全県	—	—	平年並
	ウコンノメイガ	全県	やや遅い	—	やや少ない
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	やや少ない
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	やや多い
ねぎ (夏どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	平年並	平年並
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	少ない	やや少ない
	ネギハモグリバエ	全県	—	平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ	全県	—	—	やや多い
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや多い	やや多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	少ない	やや少ない
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
	シロイチモジヨトウ	全県	—	—	やや多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
きゅうり	べと病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	うどんこ病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	斑点細菌病	全県	—	多い	多い
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	褐斑病	全県	—	やや少ない	平年並
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	平年並	やや多い
	ワタヘリクロノメイガ	全県	—	多い	多い
トマト	灰色かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	葉かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ヒラズハナアザミウマ	全県	—	やや多い	多い
	オオタバコガ	全県	—	少ない	やや少ない
えだまめ	べと病	全県	—	多い	多い
	ツメクサガ	全県	—	平年並	やや多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや多い	やや多い
	黒星病	全県	—	多い	多い
	炭疽病	全県	平年並	平年並	やや多い
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	やや少ない	平年並
	カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	平年並
	キンモンホソガ	全県	早い	やや少ない	平年並
なし	黒星病	県北部・県中央部	—	多い	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや少ない
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	多い	多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	多い	やや多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	やや少ない	やや少ない
	晩腐病	県南部	やや早い	平年並	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	やや少ない	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 穂いもち	平年並（前年より早い）	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量、日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、作況ニュース第6号によると、水稻の葉緑素計値は高く、出穂期は平年並と予想されている（±/+）。
- ウ、7月2～3半旬の全般発生開始期確認調査における葉いもちの発病地点率は30.4%（平年25.7%）、1調査単位当たりの集中分布数は0.09個（平年0.08個）で、いずれも平年並であった（ /±）。
- エ、6月6半旬以降、微気象法において感染好適日が断続的に出現しており、また、防除適期決定ほにおける病斑増加調査では7月4半旬以降、病斑が急増している地点も見られる（ /+）。
- オ、7月4半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は0.2%（平年3.1%）でやや低く、発病地点率は5.0%（平年15.5%）で低かった。また、上位葉の発病株率は0%（平年0.23%）でやや低く、発病地点率は0%（平年2.9%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場を巡回し、いもち病の発病状況に応じて防除対策を講じる。
- イ、ほ場によって出穂期が異なることから、出穂状況を確認して茎葉散布を行う。
- ウ、葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂直前と穂揃期にラブサイド剤又はビーム剤の茎葉散布を行う。
- エ、葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ粒剤、ゴウケツ粒剤、サンブラス粒剤のいずれかを散布するか、出穂直前にビーム剤と穂揃期にラブサイド剤の茎葉散布に加え、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。
- オ、育苗施設内外の衛生管理を徹底し、適正な育苗期いもち防除及び葉いもち防除を広域的に実施し、葉いもちの発生がない場合は穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後に予防剤（ラブサイド剤）の茎葉散布を行う。
- カ、薬剤の使用に当たっては、フサライド剤（ラブサイド剤、ブラシン剤等）の使用回数は3回以内、トリシクラゾール剤（ビーム剤、ノンブラス剤等）の本田での使用回数は3回以内なので注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、7月25日現在のあきたこまちの茎数は理想生育量の目標値を下回っているほ場が多い（ /-）。
- ウ、7月4半旬の抽出ほ場調査における発病株率は0.2%（平年1.9%）、発病地点率は1.3%（平

年17.6%)で、いずれも低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. セジロウンカ (第2世代幼虫)	早い(-)	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/)。

イ、秋田市予察ほにおける主飛来日は6月29日(平年7月10日)で早かった(-/)。

ウ、7月4半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は0.2頭(平年0.9頭)、粘着板法による10株当たり幼虫数は1.8頭(平年5.7頭)でいずれもやや少なかった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、第2世代幼虫の防除適期(ふ化盛期)は8月中旬と予想されるが、斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。

イ、葉色が濃いほ場で多発する場合がありますので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第2世代成虫)	- やや早い(前年よりやや早い) 早い(前年より早い)	やや多い(前年並) やや多い(前年並) やや多い(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(-/±)。

イ、予察灯における第1世代成虫の初誘殺日はアカスジカスミカメ(以下、アカスジ)で7月10日(平年7月9日)で平年並(±/)、アカヒゲホソミドリカスミカメ(以下、アカヒゲ)で6月27日(平年7月2日)でやや早かった(-/)。

ウ、7月4半旬の抽出ほ場調査における畦畔での斑点米カメムシ類すくい取り数は7.6頭(平年3.1頭)で多く、発生地点率は34%(平年36%)で平年並であった(/+)。水田内での斑点米カメムシ類のすくい取り数は0.4頭(平年0.5頭)、発生地点率は15%(平年15%)でいずれも平年並であった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月27日発表の防除対策情報第6号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. フタオビコヤガ (第3世代幼虫)	やや早い(-)	少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ、7月4半旬の抽出ほ場調査における第2世代幼虫の水田内すくい取り数は0.7頭（平年3.3頭）で平年よりやや少ない、発生地点率は10.0%（平年41.2%）で低く、食害株率は0.1%（平年21.3%）でやや低かった（-/ー）。

ウ、7月1～4半旬の予察灯における誘殺数はやや少なかった（-/ー）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、8月上旬の中齢幼虫（体長1～1.5cm）が主体の時期に上位2葉を調査し、食害株率が100%かつ食害度が25を超えない場合は防除の必要はない。

イ、7月4半旬の抽出ほ場調査において鹿角、北秋田地域の一部ほ場で第2世代幼虫のすくい取り数が多かったため、多発に注意する。

ウ、葉色が濃い、山間部等の風通しの悪いほ場で多発する場合がありますので注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. アワヨトウ（第2世代幼虫）	ー	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、侵入世代成虫の飛来量は平年並～多かった（/+）。

イ、6月5～6半旬の牧草地巡回調査における㎡当たり幼虫数は0頭（平年0.44頭）で少なかった（-/ー）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とする水田は少ないと見込まれるが、葉色が濃い水田、いもち病によるズリコミ田、苗代跡、水害跡など軟弱な稲に発生する機会が多いため、注意深く観察する。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は直ちにスミチオン乳剤で防除する。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ニカメイガ (2回発生地帯の 第2世代)	—	平年並	平年並	7月4半旬の抽出ほ場調査において第1世代の被害株率はやや高かったが、フェロモントラップにおける総誘殺数は少ない～平年並であった。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	やや少ない	やや少ない	7月4半旬の抽出ほ場調査において第1世代による被害は確認されなかった。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月23日現在、飛来は確認されていない。 7月4半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
ヒメトビウンカ	—	やや少ない	やや少ない	7月4半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数はやや少なかった。斑点米カメムシ類との同時防除が可能である。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月4半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。

B 大豆

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
1. 紫斑病(子実)	やや早い(—)	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い(—/)、降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。
- イ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日(平年6月10日)であったことから、開花期は平年並と見込まれる(±/)。
- ウ、前年収穫期の被害粒率は平年並であった(/±)。
- エ、種子塗沫処理による防除が普及している(/—)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、開花期20～30日後にアミスター20フロアブル等で防除する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。
- イ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。
- ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期(発生盛期)	発生量
2. アブラムシ類 (ジャガ仔ヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	平年並(前年より遅い) 早い(前年並)	やや少ない(前年並) 多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ジャガイモヒゲナガアブラムシ（-/-）、ダイズアブラムシ（-/+））。

イ、7月4半旬の秋田市予察ほ調査においてジャガイモヒゲナガアブラムシは確認されておらず（平年初確認7月3半旬）（+/ ）、ダイズアブラムシの初確認は7月2半旬（平年7月6半旬）で早かった（-/ ）。

ウ、7月4半旬の秋田市予察ほにおける発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシが0%（平年0.7%）で平年並（ /±）、ダイズアブラムシが10.0%（平年2.2%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多く見られる場合はアグロスリン乳剤等で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	-	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、前年の収穫期の被害粒率はやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、マメシンクイガとの同時防除に努める。ただし、プレバソンフロアブル5を除く。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. ウコンノメイガ	やや遅い（前年より遅い）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、7月4半旬の秋田市予察ほ調査において産卵は確認されていない（平年産卵盛期7月3半旬）（+/ ）。

イ、7月4半旬の巡回調査における叩き出し成虫数は0.2頭（平年1.9頭）、茎当たり卵塊数は0.01個（平年0.08個）、予察灯における7月4半旬までの誘殺数は、1頭（平年13.1頭）でいずれもやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので注意する。

イ、7月6半旬にほ場全体で40~60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤等で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. フタスジヒメハムシ	-	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、前年の収穫期の被害粒率はやや低かった（ /-）。
- ウ、種子塗沫処理による防除が普及している（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、マメシクイガとの同時防除に努める。ただし、プレバソンプロアブル5を除く。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. マメシクイガ	平年並（前年並）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、成虫の羽化は日長に大きく影響されるため、発生時期の変動は小さい（±/ ）。
- イ、前年の収穫期の被害粒率は高かった（ /+）。
- ウ、各地域振興局の調査によると、播種盛期は6月12日（平年6月10日）であったことから、開花期は平年並と見込まれる（±/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、連作により密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。
 - ①アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤は8月下旬～9月上旬に1回散布する。
 - ②サイアノックス剤、トレボン剤、プレバソンプロアブル5等は9月上旬に1～2回散布する。
- イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は2.6%（平年4.2%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。
- イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。
- ウ、べと病やさび病の病斑跡や害虫の食害痕に二次的に感染する可能性があるので注意する。
- エ、本両病害は病徴観察による識別が困難であるため、両方に効果のある薬剤であるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤等に展着剤を加用して散布する。その際は収穫前日数に注意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる可能性があるため、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は17.8% (平年25.4%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC等を茎葉散布、または、ダントツ粒剤を株元散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は14.5% (平年15.7%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。

イ、ネギアザミウマとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シロイチモジヨトウ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%であった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アタブロン乳剤、アディオソリン乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤等を収穫前日数に注意して散布する。

D ねぎ (秋冬どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.2%（平年0.8%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。

イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。

ウ、べと病やさび病の病斑跡や害虫の食害痕に二次的に感染する場合がありますので注意する。

エ、本両病害は病徴観察による識別が困難であるため、両方に効果のある薬剤であるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤等に展着剤を加用して散布する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合がありますので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類（ネギアザミウマ）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は6.8%（平年17.0%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC等を茎葉散布、または、ダントツ粒剤を株元散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は5.7%（平年16.3%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。

イ、ネギアザミウマとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シロイチモジヨトウ	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0%であった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アタブロン乳剤、アディオ
ン乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤等を収穫前日数に注意して散
布する。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は6.6%（平年19.2%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、草勢が衰えると発病しやすくなるので草勢の維持に努める。

イ、風雨等により損傷した茎葉の整理を行い、発病前に予防剤を散布する。

ウ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンド
ライフロアブル等の治療効果がある薬剤を散布する。

エ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温
時の使用を避ける。

オ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、E B I 剤（サプロール乳剤等）、ポリオ
キシシAL水和剤、ポリベリン水和剤、パルミノ等の治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかる
ように散布する。

イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高
温時の使用を避ける。

ウ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 斑点細菌病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は16.1%（平年6.4%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、銅剤又はその混合剤により防除に努める。

ウ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 炭疽病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（平年0.6%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

オ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い（ /+）、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.4%（平年1.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ、発生後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000等の予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、耐性菌が確認されているため、防除しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択し、散布する。また、同一系統薬剤の連用を避ける。

エ、降雨により発病が助長されるため、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における発生株率は9.5% (平年8.9%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、定期的に薬剤を散布する。

イ、抵抗性出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ワタヘリクロノメイガ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は2.2% (平年0.6%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多いときは、アフーム乳剤、コテツフロアブル等で防除する。

イ、老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	—	やや少ない(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は6.2% (平年14.2%)、発病度は1.6 (平年4.1) でいづれもやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤は耐性菌が確認されているため、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 葉かび病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は2.8%（平年13.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、耐性菌出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヒラズハナアザミウマ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、北秋田市予察ほにおける7月中旬の青色粘着板への誘殺数は419頭（平年237頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるため除草に努める。

イ、被害果の摘果を行う。

ウ、スピノエース顆粒水和剤、ベストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤等を花房に付着するよう丁寧に散布する。ただし、抵抗性出現回避のため同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. オオタバコガ	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、北秋田市予察ほにおける7月下旬の被害果率は0%であった。

ウ、秋田市防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数は0頭（平年1.4頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので注意深く観察し、捕殺する。

イ、被害が多くなってきたら、防除を徹底する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (リタアブラムシ) (モアアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月5半旬の巡回調査における発病茎率は5.0% (平年2.6%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと予想される場合は、フェスティバルC水和剤、またはランマンフロアブルを株元や葉裏にかかるように丁寧に散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. ツメクサガ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月5半旬の巡回調査における発生茎率は1.0% (平年1.5%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は年2回発生する。第2世代幼虫は8月に発生し、葉ばかりでなく莢も食害する。

イ、幼虫の発生初期にトレボン乳剤を散布する。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期に散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ダイズサヤタマバエ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月5半旬の巡回調査における50茎当たりの被害莢率は0% (平年0.0%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、本種は着莢期が8月以降となる作型・品種で発生が多い。
 - イ、着莢期にアルバリン／スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤を散布する。
 - ウ、中晩生品種では開花日10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃および14日後頃の2回、アルバリン／スタークル顆粒水溶剤を散布することにより、被害率を低くすることができる。
- ※開花日：ほ場全体で50%程度の開花が確認された日とする。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中～下旬の巡回調査における発病葉率は2.1%（平年1.5%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤、ロブラール水和剤、ユニックス顆粒水和剤47のいずれかを主剤に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシシンAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、Q o I 剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中～下旬の巡回調査における発病地点率は県北部では75.0%、中央・県南部では7.1%であった。6月中旬より高まり、指導機関への被害葉等の持ち込みが増加している（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、7月9日発行の注意報第1号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	平年並（前年並）	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中～下旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。
- ウ、6月から7月上旬の降水量は多かったことから感染量は多かったと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある木は伐採する。
- イ、二次感染防止のため、発病果は直ちに摘み取り、土中に埋める。
- ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- エ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。本剤の総使用回数（3回）に注意する。
- イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中～下旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を主剤に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌出現回避のため、年間1～2回の使用とするが、これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47を主剤に加用して散布する。
- ウ、QoI剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほ（3か所）における6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップの総誘殺数は89頭（平年201頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害果は直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。
- イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに薬剤防除を行う。ただし、有機リン剤を使用する際は

早生品種や中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中～下旬の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は1.52頭（平年0.09頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、コロマイト乳剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル等を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の殺ダニ剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

ウ、コロマイト乳剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温時には使用しない。また、薬害（葉の黄変、葉裏の褐変）が発生するおそれがあるため、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40は混用しない。

エ、スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を回避するため、先にスターマイトフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中～下旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.00頭（平年0.04頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、コロマイト乳剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル等を散布する。

イ、リンゴハダニのみ発生している園地では、サンマイト水和剤、ダニサラバフロアブル、ピラニカ水和剤のいずれかを散布する。なお、使用する際は早生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

ウ、ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、凝集を回避するため、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

エ、その他の注意事項はナミハダニの項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネカメムシ)	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月中～下旬の巡回調査における被害果率は0.1% (平年0.2%) でやや低かった (/-)。

ウ、防除適期決定ほ (2か所) における7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は56頭 (平年66頭) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況を良く確認する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地が多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、スプラサイド水和剤及びスミチオン水和剤40の使用時期は収穫30日前までなので、使用する際は早生品種や中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ (第4世代幼虫)	早い (前年より早い)	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (-/+)。

イ、横手市予察ほにおける第2世代成虫の誘殺始期は7月2半旬 (平年7月3半旬) で早かった (-/)。

ウ、7月中旬の巡回調査における被害葉率は0.1% (平年0.5%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、防除適期は、県北部が8月4～5半旬、県中央部・県南部が8月3～4半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除上注意すべき事項

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

- ア、7月上～中旬の降雨日数、降水量は多かった（ /+）。
- イ、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- ウ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は0.02%（平年0.03%）で平年並（ /±）、発病果率は0.60%（平年0.19%）で高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。
- ウ、スピードスプレーヤで防除する場合は、1列おきではなく全列を走行し、かつ低速で丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分に対しては当日中に手がけて補正散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	やや少ない（前年並）

（1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は1.7%（平年9.9%）でやや低かった（ /-）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲で発病が多い。
- イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。
- エ、多発条件下では、ポリオキシソルボン水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシソルボン剤の使用は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	平年並（-）

（1）予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。ただし、年間使用回数（3回）を遵守する。
- イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬の総誘殺数は、97頭（平年220頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.05頭（平年0.01頭）で多く、発生地点率は9.1%（平年13.0%）で平年並であった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、コテツフロアブル、コロマイト水和剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブル水和剤のいずれかを散布する。コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、コテツフロアブルの効力低下がみられる園地では本剤を使用しない。

エ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. リンゴハダニ	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、コロマイト水和剤、スターマイトフロアブル、ダニゲッターフロアブル、ダニコングフロアブル、ダニサラバフロアブル水和剤のいずれかを散布する。コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるため高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネオカメムシ)	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.05%）で平年並であった（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のチャバネオカメムシフェロモントラップのカメムシ類の総誘殺数は179頭（平年48頭）で多く、特に大館は130頭（平年12頭）が多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるため、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地が多いため特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、有機リン剤を使用する際は早生～中生品種の収穫予定日を十分に考慮する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）、発病房率は0%（平年0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

ウ、予察ほにおける初発日は7月23日（平年7月22日）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、袋かけ以降に散布する薬剤は、コサイド3000、ホライズンドライフロアブル、ボルドー剤のいずれかとする。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。
- イ、ホライズンドライフロアブルは耐性菌出現回避のため年間1回の使用とし、かつQoI剤との連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は、キャンベル・アーリーが0.10%（平年0.47%）、巨峰は0%（平年0.84%）でいずれもやや低かった。発病果房率は、キャンベル・アーリーが0.10%（平年0.19%）、巨峰は0%（平年0.44%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病葉や発病果房は摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	やや早い（前年並）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、ぶどうの成熟期は平年より早いと見込まれる（ -/ ）。
- ウ、6月上旬の巡回調査における発病果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.34%）、巨峰が0%（平年2.02%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.07%）、巨峰が0%（平年0.03%）でいずれも平年並であった（ /±）。
- ウ、防除適期決定ほ（2か所）における7月1～3半旬の総誘頭数は1頭（平年25頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、例年被害の多い園地では、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤、ディアナWDG、エク

シレルSEのいずれかを散布する。ただし、使用する際は収穫予定日を十分に考慮する。
イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間1～2回にとどめる。

IV. 気象予報

平成30年7月26日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月28日～8月24日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、東北太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、平年並の確率50%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北地方日本海側）

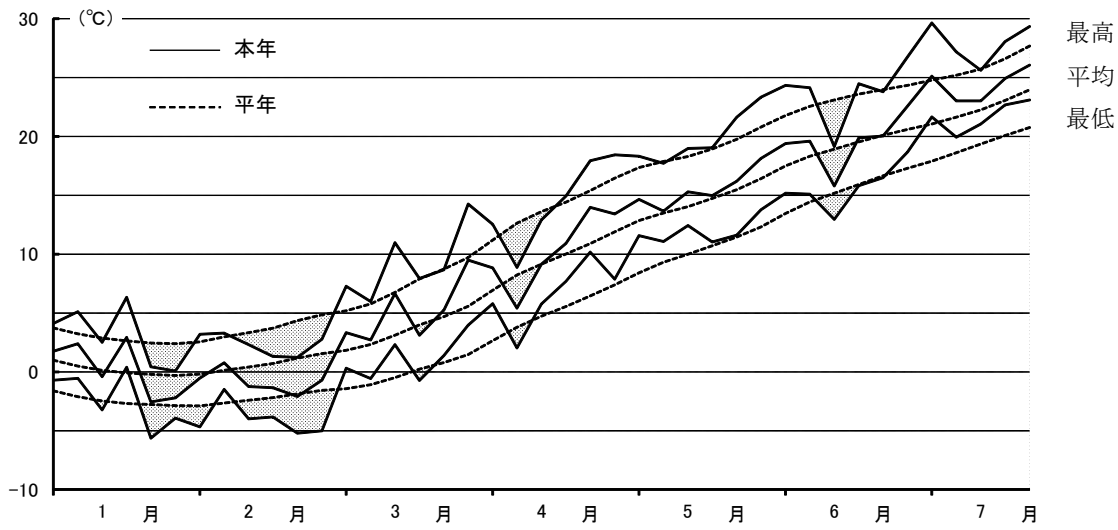
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	30%	50%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率

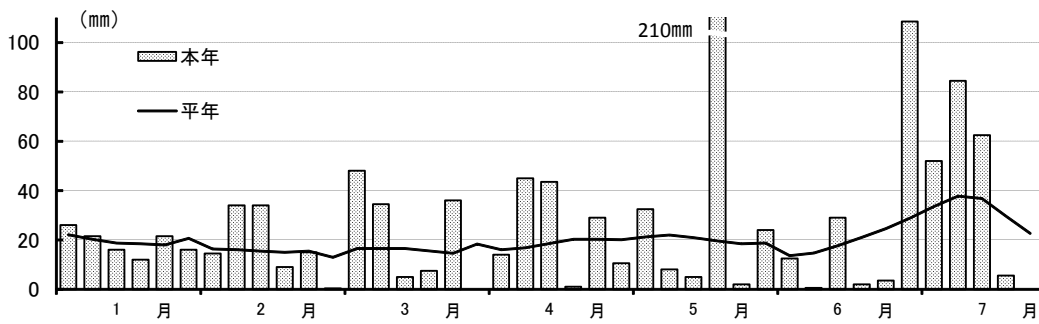
	低い	平年並	高い
7/28～8/3	10%	20%	70%
8/4～8/10	20%	50%	30%
8/11～8/24	30%	30%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬)

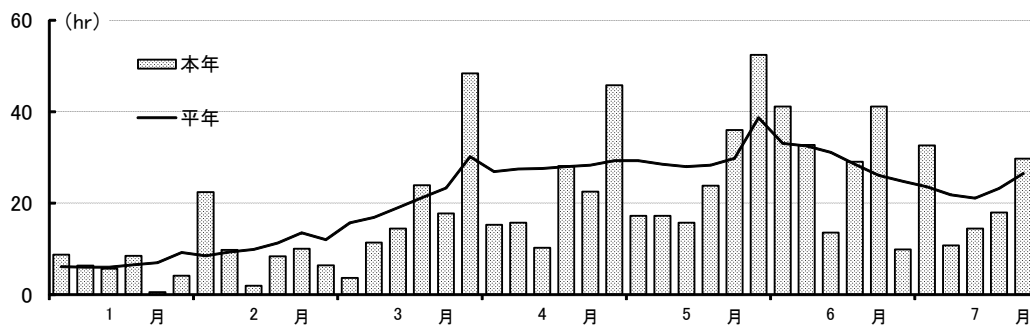
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

**平成30年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

平成30年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・養蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の家畜及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。